

■ 編集だより

編集後記

2019年、明けましておめでとうございます。

本号では、てんかんに関する症例報告、精神科臨床におけるてんかん治療、抗てんかん薬に関する特集を組んでいる。本症例報告の確定診断に至るまでの過程をじっくり読みこむと、てんかんという疾患の奥深さを知ることができる。特集では、てんかんの診断治療の基本から、新しい抗てんかん薬の使用上の注意点、てんかんを併発する知的障害のある方への抗てんかん薬投与の治療上の留意事項、抗てんかん薬のてんかん以外への有用性などが取り上げられている。臨床現場では改めて情報をアップデートしておくべき内容であろう。

私のクリニックでは、高齢者のてんかんに加え、30代までのてんかんを抱える人の受診が多くなってきているように感じている。高齢者のてんかんを診る機会が増えているのは、高齢化率全国上位の島根の地ならば当然であろうが、総合病院小児科から継続加療の紹介例も増えている。その人たちは、不安障害などを併発していることが多く、精神科的なサポートが必要となっている。新しい抗てんかん薬は長期投与が必要な人々には、副作用が少なく有用であるが、それでも本特集で取り上げられている有害事象の可能性を念頭において治療を行うことが重要だと改めて勉強になった。

編集委員会では、学会のシンポジウムの中から特集として魅力的と考えられるテーマ・内容を選び、総説の論考として依頼し、執筆していただいている。執筆者には、シンポジウムの口頭発表と比較すると、より緻密な記載とクリティカルな内容をお願いしている。その特集を担当する編集委員は、それぞれの論考のバランスや重複を避けるように心がけているが、発行の締め切りとにらめっこすることもしばしばで、「詰め」が甘くなることもある。重複している内容があるとすれば、それが今のトピックであると考えてもらおうと編集側としては嬉しい。

本号で多職種協働の連載が完結した。この連載は、本学会の多職種協働委員会の議論の深まりを反映したものである。多職種協働を網羅的に掲載する試みは国際的にも先駆的なものである。本号では連載の締めくくりとして、精神科医の役割を取り上げている。連載を振り返りつつ、本号を読むと、精神科医の役割の重要性が認識でき、臨床での動き方、発言に役立つであろう。

ICD-11が正式発表される本年6月以降に、ICD-11の新連載が始まる予定である。企画者である神庭重信先生の序文から掲載が開始される。神庭先生からは、この特集はICD-11を学ぶ人の必読文献になるようにしたいとの意欲をお聞きしている。充実した連載をご期待下さい。

会員の方々から、特集や連載のテーマの要望をいただければ、編集委員としてはとても嬉しい。本年も当学会誌をよろしくお願い致します！

細田真司